

ロシア昔話「ゆきむすめ」とその受容研究 —明治期・大正期を中心に—

A Study of the Russian Fairy Tale “Snow Maiden” and its Acceptance in Japan —Focusing on the Meiji and the Taisho Eras—

丸尾 美保

MARUO Miho

1. はじめに：ロシア昔話「ゆきむすめ」

「ゆきむすめ」は、明治期の児童出版文化において、最も早い時期に受容されたロシア昔話の一つであった。「ゆきむすめ」の話は、子どものいない老夫婦が雪で女の子の像を造ると、それが動き出して夫婦の子どもの「ゆきむすめ」となって美しい娘に成長するが、春になると悲しそうな様子となり、夏になって友だちに誘われて森に行き、たき火を飛び越えて消えてしまうという内容である。この昔話は、明治 37 (1904) 年 2 月に児童雑誌『少年世界』に掲載されて以来、大正期には絵雑誌などにも翻案され、現在では数種の絵本が出版されている。なかでも内田莉沙子再話・佐藤忠良画『ゆきむすめ』(福音館書店、1963) や岸田衿子文・スズキコージ絵『ゆきむすめ』(ピリケン出版、2005 旧版：世界文化社、1973) は、長く親しまれている。

本論では、まず「ゆきむすめ」がロシア昔話として認知された源泉について検証し、ロシアにおけるゆきむすめの内包するイメージについて考察する。ついで明治・大正期に日本の子どもに紹介された経緯をその原典を推定しながら網羅的に見ていき、日本におけるゆきむすめ像の変遷についても概観する。

2. 昔話「ゆきむすめ」成立の源泉

まず「ゆきむすめ」の昔話としての最初の出典について考察したい。ロシア語でゆきむすめは、“Снегурочка” スネグーロチカ (発音は、スニグーラチカ) とか、“Снегурка” スネグールカと呼ばれている。Снег スネークは雪で、スネグーロチカ・スネグールカは「雪の女の子」「ゆきむすめ」という意味になる。

ロシア昔話の基礎資料であるアフナーシエフ А. Н. Афанасьев (1826-1871) の出版した『ロシア民話集』«Народные Русские сказки» (1855-63) には、34 番「ゆきむすめときつね」“Снегурочка и лиса”が所収されている。しかし、この話は、森でひとりぼっちになったゆきむすめが狐の背に乗って帰ってくる内容で、焚火を飛び越えて消える「ゆきむすめ」とはモチーフが異なっている。ダーリ В. И. Даль (1801-72) の再話した「おじょうちゃんの雪むすめ」“Девочка Снегурочка”も同モチーフの話である。狐の背に乗って帰ってくるゆきむすめの話は、今日ロシアでは「ゆきむすめときつね」として普及している。

ソビエト時代、昔話には再話者を記載するのが一般的であったが、焚火を飛び越えて消えてしまう「ゆきむすめ」の絵本には再話者の記述がなく、単に「ロシアの昔話」となっているものが多かった。ロシアの子どものための作品を日本に多数紹介した内田莉沙子 (1928-1997) も『ロシアの昔話』(福音館書店、1989) の後書きに、収録した作品のうち「どうしても再話者不明のもの二点」として「雪むすめ」をあげている¹。内田が再話し佐藤忠良が絵を描いた『ゆきむすめ』が出版された 1960 年代には、再話者のわかる資料が入手できなかったと推測される。1970 年代以後はイリーナ・カルナウーホワ (1901-1959) の再話による絵本も散見されるが、ロシア昔話よりと書かれており、再話の基となった資料の出典は不明であった。

(1) アファナーシエフ『スラブ人の詩的自然観』の"Снегурка"「ゆきむすめ」

今回調査したところ、雪から作られたゆきむすめが生命を持ち、夏にたき火を飛び越えて消えるモチーフは、アファナーシエフの3巻の大著『スラブ人の詩的自然観』《Поэтические воззрения славян на природу》(Изд. К. Солдатенкова, 1866-69)の第2巻(1868発行)に、民衆の雪の自然観を詩的に示している話の例として紹介されている"Снегурка"スネグールカ(ゆきむすめ)にその原型が見られることが判明した。本文中の紹介であるが、"Снегурка"は冒頭から結末まで、一話としての形態と内容を備えている。梗概は、子どものいないイワンとマリアが雪で人形を作ると命を得てゆきむすめになり、二人の娘として一冬の間美しく育ったが、イワンの日のたき火を飛び越えて消えてしまった、というものである。(筆者による抄訳は資料1を参照)この話にアファナーシエフが付けた注によると、出典はマクシーモヴィチ Максимович の作品集『キエフ人』《Киевлянин》第1巻、1840及び『三つの話と一つの小話』《Три сказки и одна побасенка》、1845)となっている²。挿絵はなかった。

この話についてアファナーシエフは、自然現象である雪に対する民衆のファンタジーがうかがえると考察している。話の内容には、老夫婦がゆきむすめを作っているときに通りがかりの人が神 Бор の加護を願っており(挨拶とも解釈できる)、老夫婦の返答の言葉からも神の祝福がゆきむすめの出生に関わったかのように読みとれる。

ソビエト時代の「ゆきむすめ」の再話では、アファナーシエフの"Снегурка"をほぼそのまま再話したカルナウーホワの場合でも、神のくだりは除かれているため、原典に関する言及がなされなかったとも推測される。

(2) ラング作 *The Pink Fairy Book* 所収の"Snowflake"

明治期に日本に「ゆきむすめ」の話が入ってきたのは、アファナーシエフの原典からではなかった。最初に『少年世界』に掲載された「雪娘」は栗原薫花による再話であったが、同誌の月号前に同作者による「犢(こうし)の養子(ようし)」(1903.10.5、11.5)が掲載されていることから判断すると、原典は両方の話を掲載しているアンドリュー・ラング Andrew Lang (1844-1912) の *The Pink Fairy Book* (1897) 所収の"Snowflake"と推定される³。日本での受容に関しては次章で扱うが、ラングの"Snowflake"に関しても考察しておきたい。

"Snowflake"は、おじいさんとおばあさんの名前が Ivan と Marie と、アファナーシエフの"Снегурка"と同じであり、プロット構成もほぼ同様である。しかし、ゆきむすめの名前が Snowflake であること、雪を卵の殻を脱ぎ捨てるようにして娘が生まれたこと、村娘たちが春の歌を歌うこと、おばあさんが細やかに Snowflake を気遣うこと、Snowflake が消えた後で村人たちが何日も探し回るなど結末部分が叙情的であることなどは、アファナーシエフと異なっており、ラングらしさの感じられる情感がこもった fairy tale 風の「ゆきむすめ」となっている。なお、1897年版のこの話に挿絵は入っていない。

ラングは、出典を"Slavonic story. *Contes Populaires Slaves*, traduits par Louis Leger. Paris: Leroux, Editeur."「ルイ・レジェ訳の『スラブ昔話集』パリ、ルルー社」と記している。調査したところ、フランスのスラブ言語学者 Louis Léger (1843-1923) の *Recueil de Contes Populaires Slaves*『スラブ昔話集』が、パリで1882年に Ernest Leroux, Editeur 社から出版されている。所収されている33話のうち9番目の話"Blanche-Neige, conte russe"「ゆきしろ、ロシアの話」が、内容から"Snowflake"の原典と判明した。この話の出典について Léger は、"Blanche-Neige (Sniegourka), ERBEN, d'après un recueil de Maximovitch que je n'ai pas sous la main."「ゆきしろ(スネグールカ)、ERBEN、マクシーモヴィチの作品集(筆者未所蔵)に基づく」と記している(p.XI)。Erben (Karel Jaromír Erben(1811-1870)チェコの歴史家・作家と推測)は、1850-60年代にチェコ語で数冊のスラブの民話集を出版しているため、そのいずれかに掲載されたマクシーモヴィチの採話(再話?)を紹介したものと推定できる。元のタイトルがアファナーシエフの引用同様にスネグールカであることから、Erben とアファナーシエフはどちらも同じマクシーモヴィチの原典を用いていると判断される。

(3) マクシーモヴィチ再話"Снегурка"「ゆきむすめ」

マクシーモヴィチ(1804-1873)⁴の原典は未見であるが、1874年出版のJohn T. Naake(生没年不明)著 *Slavonic Fairy Tales*, London 掲載の"Snow-Child (From the Russian)"と、1890年のC.J.T. (Charles John Tibbit 生没年不明)著 *Folk-lore and legends, Russian and Polish*, London 掲載の"Snyegurka" (スネグールカ) の2話は、原典が記されていないが、"Blanche-Neige"の人物名、プロット、歌、細かい語句などが一致しており⁵、レジェの仏訳"Blanche-Neige"同様にマクシーモヴィチの原型を伝えていると推測できる。レジェの翻訳(著者表記に「翻訳」と記載)は、老夫婦のなまえを Ivan と Marie としており、卵の殻のように雪が落ちて娘が現れること、村娘の春の歌、ゆきむすめが消えた後で村中の人を探し回ること、Ivan と Marie はさらに長く捜すことなどはラングと同様であり、ラングはかなり忠実にレジェの"Blanche-Neige"を踏襲していることが判明した。

マクシーモヴィチを再話したこの3作と比較したところ、ラングの再話は、神の思召しで老夫婦には子どもがなかったこと、ゆきむすめを老夫婦が雪から作っている時に、通りすがりの人から神の祝福があったことを除くなど、宗教性を薄めている。一方、アフナーシエフは、歌を除き、老夫婦のゆきむすめを気遣う描写を削除し、さらに、ゆきむすめが消えた後にみんなで探し回ったことや老夫婦の歎きも省略していると推測する。

3. 「ゆきむすめ」の内包するイメージ

アフナーシエフは雪から生まれたゆきむすめは自然現象の幻想的な象徴であると考察しているが、夏にゆきむすめが焚火を飛び越えて消える夜は、マクシーモヴィチの原典からの翻訳と推測される3書では"Saint-Jean"、"Saint John"の日の前日であり、アフナーシエフの"Снегурка"では"на Иванов день" (イワンの日) である。この日は、洗礼者ヨハネ(ヨセフ/ジョン)の日(6月24日)でロシアではイワン・クパーラ(洗礼者イワン)の日と呼ばれて、民衆にとっては最も楽しい祭であった。前日と合わせて祝われるクパーラの祭(イワンの日)は夏至祭に当たり、今日でもロシアやウクライナ、ベラルーシなどの東欧各地で祝われている。その中心は水浴と焚火で、焚火の上を飛び越えると健康と幸せが来ると言われており、また、薬草を摘んだり、花冠を作ったり、男女の恋愛占いとも結びついている。黄と青の二色の花びらを持つ花 *иван-да-марья* 「イワンとマリア」(ママコナの一種)にも、この日にちなんだ言い伝えがあり⁶、「ゆきむすめ」の老夫婦の名前と関連していると考えられる。

ゆきむすめに関する各種の資料を調査したところ、現在のロシアでは、ゆきむすめ(スネグールカ・スネグーロチカ)に以下の4つのイメージが結びついていると考察される。

- ①もともと民間信仰で神話のパルン(ジェット・マロース=厳寒じいさん・冬の化身)と結びついた存在であり、氷が春に溶ける不思議を体現した存在。雪の精。
- ②昔話の雪から生まれた女の子:アフナーシエフ「スネグールカ」(『スラブ人の詩的自然観』所収)や昔話「ゆきむすめときつね」(『ロシア民話集』所収やダーリの再話)のスネグーロチカ。現在はどちらもタイプの話でもスネグーロチカと呼ばれている。
- ③オストロフスキーA.Островский(1823-1886)の戯曲«Снегурочка»スネグーロチカ『雪娘』に登場する天上で生まれた美しい15歳の娘:この戯曲は1873年にアフナーシエフの「スネグールカ」に触発されて書かれた。雪娘はジェット・マロースと春の美(春の精)との間に密かに生まれた少女で、人間界に降りて若者に愛されるが、恋することができない。母に願って愛する心を得たのもつかの間、太陽に当たって溶けてしまう。この戯曲にはチャイコフスキーが劇音楽を書いている。1882年にリムスキー・コルサコフが作曲したオペラは評判となり、今日まで上演され続けている。雪娘は、青白色の豪華な毛皮のシューバなどを身に付けた金髪の少女として描かれている。
- ④新年のキャラクターとしてのゆきむすめ:宗教色を排したソビエト時代、新年が祝日として認定された1935年に、サンタクロースの代わりとして、オストロフスキーのオペラで有名なジェット・マロースとその孫娘と

してのゆきむすめが登場した（ゆきむすめは革命前にも新年の飾りに使われていた）。1937年にモスクワの労働組合会館に二人の像が飾られてから、新年の定番のキャラクターとなった。新年のゆきむすめは、豪華なシューバの衣装を身につけた長いお下げ髪の少女で、ジェット・マロースが子どもたちにプレゼントを配る手伝いをする。

これらのゆきむすめのイメージは、俗人を越えた超自然の存在であり、理想の少女像であるとも言える。共通しているのは、美しいこと、賢いこと、やさしいことなどであるが、時代によってその理想の内容は変化している。アフナーシェフは、全身真っ白で血の気がないが、「飲み込みが早く、言われたことは何でも理解し、聞き惚れるほどの甘い声をしており、善良で従順で、愛想も良い」と描写している。ソビエト時代のカルナウーホワの再話では、「色白で青い目、亜麻色の髪が腰まであり、とても美しい」と描写されており、性格は書かれていないが、再話者の記載されていないものも含めて、絵本では糸紡ぎの道具とともに描かれるのが定番であった⁷。ソビエト時代には、仕事が早いとか歌がうまいとゆきむすめが表現されている絵本もあった⁸。近年発行されている絵本を調査したところ、現代のゆきむすめはソビエト時代よりも幼い女の子として描かれているものが増えてきており⁹、少女の場合でも豪華なシューバを身に付けているなど、働くイメージは薄くなっている¹⁰。

一方、ラングの再話"Snowflake"では、Snowflake は日を追って美しくなり、老夫婦や村の子どもたちに人形のようにかわいがられて、新しい服を着せられたり、歌を教えられたり、一緒に遊んだりして過ごし、賢く、よく気がついて、すぐにやり方を覚えてしまうという、13歳は過ぎているようなおとなびた少女に成長する。気立てが良く素直で愛らしい (so good and obedient; and so pretty, too) とされ、肌は雪のように白く、眼はワスレナグサのように青く、髪は長くて金髪、ただし血の気がなかったと描写されている。レジェの"Blanche-Neige"及びNaakeとC.J.T.の再話に書かれている「聞き惚れるほどの甘い声で話した」という特徴（マクシーモヴィチの原文にあったと推測される）は除かれているが、ほぼレジェのフランス語の文章を英訳した内容であった。

4. 日本での受容の歴史と描かれたゆきむすめ像

「ゆきむすめ」は、アフナーシェフの『ロシア民話集』に収録されていないためか、日本への紹介は、大正末期までロシア語の専門家ではない作家によってなされている。ここでは、出版の順番に従ってできる限り網羅的に大正期までの受容について考察する。

(1) 栗原薫花「雪娘」：『少年世界』10巻3号（博文館、明治37(1904)年2月5日）に掲載

これまでのところ、『少年世界』誌に掲載された「雪娘」が最も早い日本への紹介と推定される。当時は児童雑誌が各種創刊されて発行部数を伸ばしていた時代で、各国の読物が掲載されるようになっていた。また、掲載時期は日露戦争開戦の直前であり、ロシアに関心が向いていたことも掲載に影響していると考えられる。

記事には中川葦舟(なかがわいしゅう)の挿絵が二葉入っている。葦舟は、博文館の出版物に多く挿絵を描いていた竹内桂舟の門人であった。文章は日本化されているが、挿絵は西洋の風俗で描かれている。子どもたちの服装はロシアを意識したものと思われるが、どの国であるか中途半端で、情報が少なかつたことが想像される。雪子(ゆきむすめ)の姿は蒸気として描かれている。(図①参照)

話の梗概：番平とまりが雪でこしらえた女の子は「雪子」と名付けられて賢く美しく育つが、夏に鎮守様の例祭の時に焚火の側で子どもたちと踊っていて消え、いくら捜しても見つからなかった。蒸



図①「雪娘」挿絵 中川葦舟絵

気になって空に登ったのだ。

原典は先に述べたように、アンドリュウ・ラングの *The Pink Fairy Book* 所収の "Snowflake" と推定される。冒頭は「ロシアの國のある片田舎に番平といふ年老つた農夫が居りまして其妻のまりといふ者と一所に何不足なく暮らして居りましたが、」と、ラングが記していないロシア国名を最初に書いている。訳は日本化がされていて、Ivan と Marie は「番平」と「まり」、Snowflake は「雪子」と名付けられている。雪だるまを作るために外に出て行くときは「笠」をかぶるし、"eve of St. John, or Midsummer Day" 洗礼者ヨハネの日の前夜 (夏至祭) は「此村の鎮守さまの例祭」と変更されている。また、焚火を飛び越えることは、「毎年の例に従つて枯草の大きな束に火燃して子供達は大勢で輪を作つて其まわりを歌ひながら躍つてあるく」とされ、雪子もいやいやながらその群れに入って躍りまわっている。雪子は騒ぎの最中にアッという声を残して消えてしまい、その後皆が探し回るという最後の場面は、ラングの通りに訳されている。雪子が春になって日陰にばかりいる場面や、霰が降って喜ぶ場面などは忠実に訳されているが、通りすがりの人からの神の祝福を除いたラングの再話に残っていた「神様が私たちについて子どもを授けてくださった」と Marie が喜ぶくだりは、除かれている。

雪子は、見たところ 13 歳ぐらいで、色が雪のように真っ白で、髪の毛はつやつやして漆のよう、眼がぱっちりして清しそうな具合などほんとうに可愛らしいと描写される。漆というところから黒髪が連想されるところにも日本化が見られる。村の子供達が可愛がる場所は除かれ、老夫婦のみが登場して、人形を買ってやったり着物を拵えてやったり、歌を習わせたり、書物を教えたりして可愛がる。ラングと異なるのは、「書物を教える」というところで、明治の教育状況が反映しているものと考えられる。物覚えが良く、性質が素直で、親の言いつけを良く守る申し分の無い子というのはラングの Snowflake の性質そのままであった。

(2) 無題：『幼年の友』8巻3号 (実業之日本社、大正5(1916)年3月1日)

「ゆきむすめ」を下敷きに、大正期の幼児向け絵雑誌に紹介された絵物語である。ロシア昔話から離れて、日本の話として描かれているが、老夫婦が雪だるまをつくること、春になって溶けること、探し歩くことが、「ゆきむすめ」と一致しているため、再創造であると判断した。文作者名も画家名も記されていない。

文章は、絵の余白にカタカナで書かれている。梗概は以下の通りである。おじいさんとおばあさんが作った雪だるまの中から女の子が生まれたので、おゆきと名付けた。春になって、近所の友だちと一緒に野原で遊んでいるうちに温かさでおゆきは溶けてしまった。おじいさんとおばあさんはさがして歩いた。



図②無題『幼年の友』8巻3号

絵は、見開き 2 頁に 4 コマで描かれている。全てが日本の風俗で描かれており、おゆきちゃんは大正期に都会の幼児が身に付けていた白いエプロンを着けて雪だるまの中から生まれてくるが、見る間に大きくなった後は、道行を着た着物姿に変わっている (左上のコマ。着物の模様で右端の女の子と判断できる)。冬から春になる 3 月号に掲載されており、左下のコマの外には菜の花が描かれているところからも、季節にふさわしい話として掲載されたと思われる。春の温かさが中心であり、わずか 4 コマのためか、焚火のモチーフはない。おゆき像は、「可愛らしい女の子」と記されているのみである。



図③「ユキムスメ」『幼年畫報』前半部分

(3) ヒロクニ (南部亙国) 「ユキムスメ」: 『幼年畫報』13 卷3号 (博文館、大正7(1918)年2月1日)

この話も幼児向けの絵雑誌に掲載されたものである。文章は博文館の編集者であった南部亙国 (1894-1986 本名新一、新井弘城) で、画家名は記されていない。見開き2面、4頁に仕立てられており、文章はカタカナ書きで絵の余白に書かれている。梗概は、おじいさんとおばあさんが雪で作った人形がだんだん変わってきて、ユキムスメになった、村の子たちと焚き火をしてあそぶうちに、溶けてしまったというものである。日本風俗で描かれており、名前は「ゆきむすめ」と

そのまま用いられている。ゆきむすめは春になって溶けるのではなく、冬の焚火のそばで遊んでいて溶けてしまう。キャッという声がしていなくなるころはロシア昔話「ゆきむすめ」の原話を踏襲していると考えられる。

ゆきむすめは、最初から幼児より少し大きい少女として道行を着了た姿で描かれている。(図③参照) 大正時代の絵雑誌によく見られる華やいだ道行と大きな赤いリボンが都会的である。生まれてすぐに「これから孝行いたします」と言うのは、孝行娘という日本的な理想の少女像を示していると考えられる。文章にはないが、絵ではゆきむすめはとてもかわいい、常に笑顔の少女として描かれている。

(4) 鈴木三重吉「踊の焚火」: 『大法螺』世界童話集14編 (春陽堂、大正8(1919)年10月) (初出: 『大阪朝日新聞』大正8年1月1日)

鈴木三重吉 (1882-1936) は、1916年から「世界童話集」シリーズを出版し始め、『赤い鳥』(三重吉編・発行、1918.7~1936.8) でも多くの昔話の再話を掲載している。「世界童話集」第14編『大法螺』に「踊の焚き火」(ロシア)として、「ゆきむすめ」が再話されている。特に日本化はされていないが細部に加筆をしており、ロシアの風習である洗礼者ヨハネの日などは改変されている。

「踊の焚き火」の梗概は以下の通りである。こどものないおじいさんとおばあさんが雪人形を作ると、中から女の赤ちゃんが生まれ、「雪ちゃん」と名付けた。雪ちゃんはどんどん大きく、美しくなった。春になるとくらい顔をして家の中にひきこもっていた。夏のお祭りの日に誘われて森に行った雪ちゃんは、みんなのように焚火を駆け抜けるように言われたので焚火の中に飛び込むと、あつという声が聞こえていなくなった。おじいさんとおばあさんはひどく嘆き悲しみ、村中総出で何日も捜したが見つからなかった。湯気になってかき消えたのだった。

村娘たちの春の歌や「獣や鳥にさらわれたのではない」という言い回し、細部の描写の一致などから、原典はラング作 *The Pink Fairy Book* の "Snowflake" と推定される。内容の変更は、雪ちゃんが「おぎやア／＼」となく赤ん坊として生まれたことと、St. John の前夜を暑い夏の日々のお祭りとしたことである。焚火を飛び越えることは、「一人の女の子が、じょうだんにその焚き火の中をかけぬけ」とみんなが面白がって続いたというふうで創作されている。おばあさんの「神様がついに子どもをくださった」という言葉や、ゆきむすめが春の嵐の雹を喜んだという場面は省略されており、異国らしさが薄められている。加筆は、雪ちゃんがいなくなった場面で「おや、だれでせう」「まあ、だれでせう」などと少女たちの会話を使って緊迫感を高めており、おじいさんとおばあさんが物も食べないで「おん／＼と気がひのやうになつて泣き倒れてみました」と歎きを深めたうえ、さらに毎日探し回り、雪が降ると雪ちゃんのことを思い出して、オンオン泣いたと哀れさを強めている。

雪ちゃんについては、美しく、伶俐で、気のやさしい素直ないい子だが、頬に赤い色



図④「踊の焚き火」挿絵

がないと描写されており、近所の女の子たちがお人形のように可愛がって、着物を縫ってやったり、歌を謡ってやったり、遊び方を教えたりして、だいじにしてくれた、というところはラングを踏襲している。ラングの"obedient"という言葉が「素直」としているために、より子どもらしい純真さが感じられる。鈴木淳の二つの挿絵は、雪から赤ん坊が生まれている場面と、室内にいる雪ちゃんを描いている。図④の近代的な短髪の少女は、ロシアの田舎の娘というよりも西欧のしゃれた部屋に住む同時代の女の子を想像させる。

(5) 立石美和「雪ちゃん物語」：『童話』6巻5号（コドモ社、大正14(1925)年5月1日）

児童雑誌の盛んだった大正期に『赤い鳥』とならんで文学的な童話や童謡を掲載していたコドモ社の『童話』（1920.9～26.7）に掲載されたのが、立石美和（生没年不明）再話による「雪ちゃん物語」である。冒頭に「ずっと昔の事ですが、寒いロシアの片田舎に、イヴンと、それからマアヂャといふ、年寄つた百姓夫婦が住んで居ました」書かれており、ロシアの話と明記されている。梗概は以下の通りである。子どものいない夫婦が雪で人形を作ると、息をするようになり、「妾、雪ちゃんよ！ お父さんの娘だわ！」と言って抱きついた。二人はもうさびしくなかった。冬に元気だった雪ちゃんは、春になると哀しそうに家に籠もっていたが、村の娘たちに誘われてお祭りの花輪を作り森に出かけ、夜に広場の焚き火の火渡り遊びをして消えてしまった。雲の国から来たのだから、故郷へ帰っていったのかもしれない。



図⑤ 「雪ちゃん物語」挿絵『童話』

かなり自由に細部を翻案しているため、原典を確定するのは困難であるが、百姓夫婦が雪で人形を作るときに通る人が声をかけるところから、ラング作 *The Pink Fairy Book* の"Snowflake"との推測が可能かもしれない。声をかけた年寄りの旅人がふと消えてしまうこと（神を思わせる不思議な存在化）、雪景色を霜が幾百万の眼を見開いたように輝いていると描写すること（文学的装飾）、雪ちゃんがきらきらするつららをもぎ取ってしゃぶること（童心の強調）、百姓夫婦を貧しく不仕合わせに描写し、結末も夫婦はみすぼらしい小屋にじっと向き合っていなければならなかったと終わったこと（哀話化）など、かわいそうな美しい童話とするためのいくつもの改変が見られる。洗礼者ヨハネの祭は村祭りとされ、焚火は火渡をする伝統行事のように描かれている。

雪ちゃんは、雪の降る外で大勢の子どもたちと遊ぶ活発な少女で、だれにでも親切で思いやり深く、村中の子どもで雪ちゃんを嫌う子はいないとされており、特別に老夫婦に可愛がられたり教えられたりする描写はない。ロシア風俗を意識して描かれた3箇所の挿絵は、可愛い雪ちゃんの顔、雪から生まれたところ（既に大きな少女）、火の上の少女が描かれており（図⑤）、悲劇性が強調されている（画家名不明）。

(6) 宇野浩二「ゆきだるま」(『赤い鳥』14巻2号1925年2月1日)

この話は、Arthur Ransome アーサー・ランサム著 *Old Peter's Russian Tales* 『ピーターおじいさんの昔話』所収の"The Little Daughter of the Snow"の再話である。独自のプロットを加えて再創造したランサムの「ゆきむすめ」を、宇野はさらに男の子「ゆきだるま」として再話しており、「ゆきむすめ」とは異なる独自の作品となっている。（拙著「アーサー・ランサム著 *Old Peter's Russian Tales* に基づく宇野浩二のロシア昔話再話考」『梅花女子大学心理こども学部紀要』6号、2016.3.22 参照）なお、ランサムのこの話は、昭和元(1926)年12月に発行された渋澤青花編『雪娘』（二十銭文庫9、第一出版協会）所収の「雪娘」の原典とも推定される。

(7) 吉田薫纂訳「雪子」：『ロシヤ小學讀本 第二學年』（世界文庫刊行會、大正14年(1925)5月4日）

各国の小学生が読む教科書（あるいは副読本）を訳して紹介した「欧米小學讀本」シリーズ¹¹、5カ国各8学年うち、『ロシヤ小學讀本』第二学年の巻に「雪子」として「ゆきむすめ」が掲載されている。分かっている限り

では、これが最初のロシア語からの翻訳であった。訳者の吉田薫（生没年不明）は、「露國工學士」の肩書きがついており、他に共著でロシア語会話の本の出版がある。この読本はロシアの国語教科書（あるいは副読本）の翻訳であると推測されるが、ロシア革命から6年後の出版であってもソビエト色が薄い。原典の出処などを含めて今後調査を続けたい。

「雪子」は、アフナーシェフの"Снегурка"を宗教色と叙情性を排して再話したような内容で、味わいに欠けるが、プロットは、おじいさんとおばあさんが作った雪人形から雪子が生まれた、早く大きくなったが血の気がなかった、春になると寂しそうで、霰が降ると喜んだ、「イワノフのおまつり」の日に誘われて森へ行き、頭の花輪を作り、焚火を飛び越えて消えた、ときちんと整っている。雪子が水蒸気となって「上にのぼり、うすいくもになって、^{てん}天をながれて行った」という結末もアフナーシェフと類似している。

雪子は、美しく、賢くなり、何でも分かり、何でも話ができ、しとやかで愛嬌で、15歳ぐらいに見えたと説明されている。しかし、可愛がられたり、歌を教えられたり、服を着せ替えられたりはしない。挿絵は冒頭に雪だるまを作って遊んでいる子どもたちの絵が入っているのみであり、絵柄から原典の挿絵を流用していると推測される。（図⑥参照）



図⑥「雪子」挿絵
『ロシア小學讀本 第二學年』

5. おわりに

日本での「ゆきむすめ」の受容は、それぞれの時代と子どもの文化状況をしめしている。明治期の栗原薫花「雪娘」は、日露戦争と関連してロシア昔話が意識されており、女の子も美しいと同時に教育の大切さが認識されるようになった時代性がうかがえる。大正期に入ってから、当時大量に発行されていた絵雑誌に短い絵物語としての掲載が見られた。明治期に13歳ぐらいだったゆきむすめは可愛らしい幼児として日本化されており、物語も季節にあわせた内容に変更されて絵で表現されていた。鈴木三重吉や立石美和、宇野浩二による「ゆきむすめ」の再話は、時代が下がるに従って「童話」としての性格が強まっており、ヨハネ祭も日本化されるなどロシア文化への配慮は薄れて無国籍化へつながっていった。理想的な女の子像としてゆきむすめの姿を考察したところ、大正期には教育や教養についての言及はなくなり、子どものままの無邪気な姿で描かれるようになっていった。それは時代の童心主義の風潮を反映していると考えられる。大正末期になってロシア語からの翻訳がなされたが、教科書紹介の中での生硬な訳であったこともあって、一部の眼に触れるにとどまったものと推測される。

焚火で消えたゆきむすめの物語は、一緒に幸せに暮らしていた異界の女性が去ってゆく日本の昔話「つるのおんがえし」や「ゆきおんな」と通じるところがあり、やるせない悲しみやしみじみとした情感が共感をよぶ。ロシアではかぐや姫のような天上の特別の存在、理想の少女像としてイメージされるゆきむすめは、大正期の日本では身近な存在として描かれるようになっていく過程がみられた。

1904年の明治の最初の受容から大正期の絵雑誌までは12年の間隙がある。その間をつなぐ受容がなかったのか、さらに追求していきたい。また、昭和以降の受容の形についても今後研究を続けたい。

<注>

1 内田莉沙子編・訳『ロシアの昔話』（福音館書店、1979.6）p.388。再話者不明の他の1話は、「ねことおんどり」。

2 アフナーシェフの注には、「Киевлянин 1840, 1, 71—78; Три сказки и одна побасенка, Максимовича (Киев, 1845). 『キエフ人』 1840、第1巻、pp.71-78 ; 『三つの話と一つの小話』、マクシーモヴィチ（キエフ、1845）」と書かれている。

- 3 「犢(こうし)の養子(ようし)」は *The Pink Fairy Book* では、"Peter Bull" (from Danish) として掲載されている。
- 4 マクシーモヴィチは、Максимович, Михаил Александрович ミハイル・アレクサンドロヴィチ・マクシーモヴィチ (1804-1873) を指していると推測される。マクシーモヴィチは、ロシアとウクライナの学者で、歴史家、民俗学者、言語学者であり、キエフ大学の図書館にその名前が冠されている。
- 5 C.J.T.の再話では、冬の間スネグールカは3歳の子どもぐらいに成長するとあるが、アフナーシエフとレジェ (ラングも) の再話では13歳程度に成長する。C.J.T.の老夫婦の名は、Ivan と Mary とされている。
- 6 佐野洋子『ロシアの神話：自然に息づく精霊たち』(三弥井書店、2008.12) pp.663-664。
- 7 例えば、*Снегурочка, Русская народная сказка*, худ. Т. Добровольская, Н. Лебедев, Комбинат графического искусства, 1974 (『ゆきむすめ ロシア昔話』T.ドブロヴォリスカヤ・N.レーベージェフ絵、グラフィックコンビナート、1974)、*Снегурочка, сказка*, рисунки В. Чеботарева & С. Черкасова, Дальневосточное книжное издательство, 1976 (『ゆきむすめ 昔話』、V.チェボタレフとS.チェルカソフ絵、極東図書出版、1976)、*Снегурочка, Русская народная сказка*, Обработка Ирина Карнаухова, худ. М. Успенская, Детская литература, 1976 (『ゆきむすめ ロシア昔話』イリーナ・カルナウーホワ再話、M.ウスペンスカヤ絵、児童文学出版、1976) などのゆきむすめの絵は、どれも糸紡ぎの道具と一緒に描かれている。
- 8 *Снегурочка, Русская народная сказка*, худ. Т. Ерёмкина, Мальши, 1990 (『ゆきむすめ』ロシア昔話、T.エリョーミナ絵、マルイシ出版、1990)
- 9 *Снегурочка, Пересказ И. Видревич, Иллюстрации С. Дамаскин-Попа, «РИПОЛ классик», 2013* (『ゆきむすめ』I.ヴィドレヴィチ再話、S.ダマスキン・ポプ絵、リポル・クラシック出版、2013)、*Снегурочка, Русская народная сказка*, обр. Л. Елисейевой, худ. Иван Цыганков, «Родничок». «Издательство Астрель», 2013 (『ゆきむすめ』ロシア昔話、L.エリセエヴァ再話、イワン・ツィガンコフ絵、ロドニョク、アストレリ出版、2013) など。
- 10 *Снегурочка, Русская народная сказка*, худ. С.А. Стеблина, Издательство «Улыбка», 2013 (『ゆきむすめ』ロシア昔話、S.A.ステブレリナ絵、ウリブカ出版、2013) など。
- 11 文部省の嘱託でもあった東京高等師範学校教授保科孝一が監修し、文部省国語調査嘱託の安藤正次などが訳者に名を連ねている。他の4カ国は、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランスで、40冊のシリーズであった。

(資料1)

アフナーシエフ「スネグールカ」(ゆきむすめ)の抄訳(『スラブ人の詩的自然観』第2巻、1868、pp.639-641)

農民のイワンとマリアの夫婦は睦まじく暮らし、不自由はなかったが、子どもがいないのを嘆いていた。冬が来て新しい雪が膝まで積もった。子どもたちは雪で遊び、雪だるまを作り始めた。イワンとマリアも、神が生きている子どもを与えてくれないのなら雪で子どもを作ろうと言って、作り始めた。身体をつくり、手足を作り、頭を作った。通りかかった人が、「神のご加護を！」と挨拶していった。「神は全ての人にめぐみ給う！」と答えた。雪でできた顔にイワンが口の穴を開けると、暖かい息が出てきて、目が青く輝き、にっこりすると、生きているかのように身震いをして、手足や頭を動かした。マリアは「本当に神様が私たちに子どもをくださった！」と喜んだ。ゆきむすめは日ごとどころか一時間ごとに大きくなり、ますます可愛く美しくなり、冬の間13歳ぐらいになった。賢く、良い声で話をするし、善良で従順で愛想も良かったが、全身雪のように真っ白で血の気がなかった。春になると悲しむようになり、影にばかりいて、病気ではないかと思うほどだった。霰が降ったときは喜んだが、太陽の光に溶けたときはひどく泣いた。イワノフの日に村の女の子たちが森に出かけるとき、ゆきむすめも連れていった。みんなは花を摘み、花輪を作り、歌を歌った。夕方になって焚火を燃やし、飛び越えることを思いついた。みんなはイワン・クパーラ(洗礼者ヨハネ)の唄を歌い、焚火を飛び越えた。遅れないように言われたゆきむすめが炎の上を飛んだとき、悲しい叫び声がかして、蒸気が広がり、細い雲になって空に登っていった。(原注:『キエフ人』1840年第1巻 pp.71-78、マクシモヴィチ『三つの話と一つの一口話』1845)

(筆者訳)